



平成23年度市町村トップセミナー

## これからの日本の政治を考える

開催日 平成24年2月13日(月)

会場 ホテルアウリーナ大阪 4階 金剛の間

講師 毎日新聞社 論説副委員長 与良 正男 氏



## これからの日本の政治を考える

与良正男氏  
(毎日新聞社 論説副委員長)

### 1. はじめに

私は、今ご紹介いただいたとおり、本業は新聞記者です。新聞記者になって30年以上になりますが、そのうちの二十数年間は永田町を中心とした取材で明け暮れてきました。ただ、最近は専らテレビの人のようになっていきます。大阪では、昔から「ちちんぷいぷい」という毎日放送の番組がありまして、大好きな番組なのですが、そことお付き合いしてもう10年近くになります。ですから、月に一度か二度は大阪に来ていまして、東京の記者の中では、多少は大阪事情に詳しいつもりでおります。

そういう加減かもしれませんが、知名度もどちらかといえば東京よりも大阪の方が高くて、とりわけ大阪のおばちゃんあたりには、町を歩いているとしょっちゅう声を掛けられます。「与良さんですよ」「はい、そうです」「いつも見てますよ」とか、「面白いですね、ミヤネ屋は」とか言うわけです。私は「ミヤネ屋」には出ていませんので、その程度のものなのですが、恐らく皆さんの中にも、今まで「朝ズバッ！」の取材を受けた自治体もあるのではないのでしょうか。「どうせろくでもない批判ばかりされる」という、皆さんからすると被害者同盟のような方たちもたくさんいらっしゃるかもしれませんが、そこはさておいて、お話を聞いていただきたいと思います。

後ほど橋下さんの話も詳しくお話するつもりですが、政治記者になって二十数年、よきにつけあしきにつけ、大阪の話がこれだけ東京で話題になったということは、私は経験がありません。さらにわれわれマスコミ関係の事情で言いますと、例えば毎日新聞にしても、読売新聞にしても、朝日新聞にしても、編集は東京と大阪で違うのです。もちろん大ニュースになれば東京も大阪も同じように1面トップになるのですが、大阪で発行している新聞は、やはり大阪を中心とした話題を大きく載せるようにしています。しかし、その差がだんだんなくなってきています。要するに、大阪のニュースが



そのまま東京で大きく載るというのは、私が政治記者をやり始めて初めてぐらいの体験です。

もっと内輪の話をしますと、それでもなお大阪の新聞の方が大阪の話題がたくさん載っている、橋下さんの話題がたくさん載っているということで、毎朝、大阪の新聞のコピーをファクスで東京の事務所に取り寄せるという国会議員が何人もいます。こういうことも、私は今まで経験したことはありません。

そういう意味では、本日来るのを非常に楽しみにしてしまして、後々質疑の時間も取らせていただきます。皆さんとディスカッションするのを楽しみにして来たぐらいで、今、ここは非常にホットな地です。皆さん、いろいろなお考えなりお立場があるでしょうから、話しぶりのも事実ですが、そこは越えて、私が日ごろ考えていることを偽りなくお話しし、それに対しての意見を伺わせていただきたい。今、大阪で何が起きているかということも教えていただきたいと思っています。本日のタイトルは、「これからの日本の政治を考える」とまさに直球です。このとおりのことをお話ししよう、「考える」ですから皆さんと一緒に考えようと思って参りました。

私もこういう依頼を受けて、毎月2～3回ぐらい、講演のために全国を飛び回っているのですが、近ごろはタイトルを付けるのに非常に苦労します。2～3年前、実際にあった話ですが、私も政治記者ですので、律儀に「安倍政権の行方」とか、「どうなる、福田政権」というようなタイトルを付けていたのです。パンフレットや、場合によってはポスターまで作っていただいて町中に張られるのですが、講演の日に伺ってみると、既に福田政権ではなかったというようなことが実際にありました。政治記者の見通しがいかに当たらないかという証明にもなってしまうので、今回も、「野田政権の行方」「野田政権はどうなる」「野田政権の課題」などというタイトルを付けて、まさか野田さんでなくなるということはないだろうと思いつながらも、気弱になって担保を掛けまして、こういうタイトルにしました。

## 2. 東日本大震災から1年 — 進まない復興

間もなく、東日本大震災から1年がたとうとしています。去年の3月以来日々考えているのは、政治の役割というのは一体何だろうということです。何も決められない。何も動かない。とりわけ3月11日以降、それを目の当た

りにしています、もちろん皆さんも地方政治に深くかかわってらっしゃるわけですが、国の政治というのはい体何だろう、政治家の仕事というのはい体何だろう、政治家というのはい体何をしているのだろうかというようなことを日々感じています。

少し昔の話になりますが、この話だけは語り継いでいきたいと思いたいで、ぜひ聞いていただきたいと思いたいで。3月11日、大地震と大津波と原発の事故が同時に起きました。もちろん阪神・淡路大震災の取材の経験はあるのですが、広範囲の津波と東京電力福島第一原発の事故も重なって、まるで経験のない中で取材が始まりました。毎日新聞の場合、大阪で働いている記者も九州で働いている記者も、とにかく全国からかき集めて、ピーク時で恐らく百数十人ぐらいの記者を東北3県に投入しました。

当初は道路も寸断されていたので、例えば新潟から回って入ってみるとか、青森まで飛行機で飛んで、そこからレンタカーを借りて入ってみるとい状況でした。もちろん泊まる場所もありません。食料はある程度持っていました、カップ麺を持っていてもお湯もない、泊まる場所もほとんどないので車の中に泊まる、ガソリンもだんだん切れていくという、われわれも経験したことがないような取材でした。

その中で一つだけどうしてもお話ししたいのですが、最初の1週間ぐらいい、補給路も全く途絶え、激しい余震が続く中、体育館なり何なりに避難しているところに、若い記者が出掛けていったわけです。当初出掛けていった若い記者たちも、「朝ズバッ！」の岡安という女性リポーターも、日ごろ人の悪口しか書かないような週刊誌の記者もみんな、帰ってきて異口同音に言った話があります。

避難所に避難していても、実際にはおにぎりもなかなか来ない。配られてもせいぜいが菓子パンなのです。それも数がほとんど足りない中で、われわれは体育館や小学校の避難所へ取材に行きました。皆さんも経験されたことがあるかもしれませんが、そういうときの新聞記者、テレビの記者、あるいはテレビカメラというのは、はっきり言って邪魔ですよ。恐怖におのいて苦しんでいるところにテレビカメラやライトを向けて、「いかがですか」もへったくれもないですよ。われわれの経験で言えば、嫌がられるのが当たり前なのです。

それでもなおかつ、こうべを垂れて「本当に申し訳ありません」と言いな

がら取材に行きました。そうすると、あまり嫌がられなかったのです。とりわけ避難しているおじいさんやおばあさんたちは、「よくここまで来てくれたね」「よく話を聞きに来てくれた」と異口同音に言うのです。さらに言うと、私は本当に驚いたのですが、若い記者たちが取材で話を聞きにいくと、おばあちゃんやおじいちゃんが「あんたたちも食べるものがないだろう。これから何か当てがあるわけじゃないだろう。これ、食べな」と言って、一家に二つ～三つしか与えられない、数少ない中から、菓子パンをくれるのだそうです。私も記者生活を長く続けていますが、こういう話を聞いたのは初めてでした。

最初からこんな話で申し訳ないのですが、これは東北だけではないと思うのです。当初、世界中に絶賛されたわけですが、日本中どこでもパニックも暴動も起こらずに来たのは、日本人の、東北のおじいちゃんやおばあちゃんたちの、我慢強さと優しさがあったからだと思います。ただでさえ少ない菓子パンを、本当なら「そんな話なんて聞きにくるな」と追い返してもいいような新聞記者やテレビクルーの若い子たちにくれる優しさに支えられてきたような気がします。そこで何とか乗り越えてきたと言ってもいいと思うのです。

ついでに言いますと、私は若い連中がやっているNPOを個人的に支援していきまして、そのボランティア活動に個人として参加しています。がれきを運んだりにはしませんが、子どもたち相手に何かするみたいなことで時々行っています。例えば石巻市には定期的に行っているのですが、1年近くたっても、依然としてがれきの山です。石巻は特に遅れています。

皆さんテレビでもご覧になったと思いますが、現地に行くと360度がれきの山です。これはテレビ画面や新聞の写真では絶対に見られません。現場に立つとそれが分かるのですが、360度、4階建て5階建てぐらいのビルの高さのがれきの山が至るところにあって、道路だけはつながったというぐらいの状況です。がれきの処理、とりわけ福島のがれきをどうするかという問題はますますこれから大変になってくるのだと思いますが、依然としてそういう状況にあります。

さらに言うと、これはテレビではとても話せませんが、同じ被災者・市民の中でも、赤字を承知で商売を何とか再開しよう、借金して駄目になった工場を何とか再開しよう、頼りにするものがないから自分で頑張っていこうと

する人たちと、ずっと仮設住宅でいい、避難所でもいい、ずっと支援を受けていた方が楽だと思う人たちに、二分してきてしまったという話を聞きます。

後者の人に、私たちが決して「しっかりしろ」と言うわけにはいかないですね。当然です。仕事があるかという、ありません。実際の仕事は、がれき処理を手伝って日当幾らのようなものがほとんどです。これは本当に悲惨な状況だと思いますが、要するにがれきの処理が生活の糧になっていて、それが片付いてしまったら、今度は本当に仕事なくなってしまうのです。仕事をどう確保するかという面においても、行政も国の政治も、むしろ去年に比べて今年の方がますます難しい選択に立ち向かわなければいけないという状況にあります。

菅政権時代に中枢にいて官房副長官をやっていた福山哲郎さんが、この間会ったときに言っていましたが、去年はとにかく、「大変だ、大変だ、避難してくれ」と言えば避難せざるを得ない状況だったから行政も国も何とか言えたけれども、今年の方がそれを説得するのが大変だし、雇用の面も含めて、来年の方がもっと大変です。「大変だ、大変だ」と言っている時期は過ぎて、しかも、先ほど語弊を承知で言ったように、市民の中でもいろいろ分かれてきています。

あるいは、石巻なども苦しんでいるのですが、新しいまちづくりをするので、なるべく家は建て替えないでくださいと言っていましたが、半壊ぐらいの家は、皆さんそれぞれ自費で補修して住み始めています。大規模な都市計画、再開発のようなことはできなくなりつつあるわけです。

われわれは前向きな話を一生懸命報道しますし、暗い部分についてはあまり報じませんが、現実としては、むしろ今年、あるいは来年、これからの方が、行政の人たちも地方議員も、ましてや国会議員も、難しい選択に迫られる状況にあるということをご報告したいと思います。

### 3. 政治家は何をしているのか — 繰り返される政権交代

そういう中で、被災地の皆さんの我慢強さと優しさに何とか救われてきた感じがしますが、私としては、政治家は一体何をやっているのだろうなと思わざるを得ない毎日でした。その間、国は何をやっていたか。とりわけ3月から6月、野田政権が誕生するまで、被災者がどうのこうのよりも、毎日毎



日「菅さんがいつ辞める」「今日も菅さんが居座った」「今日も菅さんは延命した」。一方で、不信任案が出る、同じ党内から小沢さんと鳩山さんが同調しかける。そういうことばかりを報道するわれわれ政治記者も悪いのですが、実際にあの人たちの関心事はやはりそれだったとしか言いようがないと思うのです。

私はあのときに、谷垣さんが入閣すればいいと思ったのです。3月11日から1週間後ぐらいに菅さんが谷垣さんに、入閣してもらえないかという電話をしています。気安く頼む方も頼む方で、もっと信義を尽くしてやるべきなのですが、それを分かった上でも、やはり大連立ですよ。私は今まで大連立など邪道だとずっと言ってきましたが、去年は、自民党から何からとにかく党派を超えて一緒に立ち向かっていくしかない、けんかしている場合ではないと思いました。

確かに、菅さんも菅さんなのです。私は菅さんとは二十数年のお付き合いですからよく知っていますが、皆さんが信じられないぐらいに短気で、何かあればすぐに怒鳴るし、いらつきます。しかし、そんなことを言っている場合ではない、青臭くて幼稚だと言われても、とにかく与野党が力を合わせていくしかない、やはりあのとき谷垣さんは入閣しておけばよかったなとまだに思っています。今はその時期を全く過ぎたと思っていますが、結果的には総理大臣が替わり、今ここに至っている状況です。

そこであらためて思うのは、今更説明するまでもなく、この国は去年まで6年連続総理大臣が替わっているのです。もう当たり前のようになっていますから、皆さん特に何も思わないかもしれませんが、これは尋常な状態ではありません。

毎年毎年、総理大臣が替わる、たまたま菅さんが2年続けて夏のサミットに行ったぐらいで、みんなサミットに行っても1回きり、鳩山さんは1回も行けませんでした。名前など覚えられるわけがありません。今までは、お友達としてイタリアという国があったのです。イタリアという国も政争が好きなどころで、毎年のように総理大臣が替わっていたのですが、ベルルスコーニは、女性スキャンダルを起こそうが何をしようが、5年も6年も長く頑張りました。

日本の場合は、ご存じのように、長かった小泉さんが辞めて以降は、6年連続で毎年総理大臣が替わっています。われわれはそれを当たり前のよ

うに、またいつ替わる、いつ替わるのように報道しがちですが、冷静に立ち返って、まずそういうシステムそのものが異常なのだと思わないといけません。しかも3.11というこの国が経験したことのない大惨事の後も、政治がまるで変わらず、同じように、いつ辞める、いつ辞めるということを繰り返しているのは、決して当たり前のことではなく、とても異常なことだと思わなくてはいけないと思います。

少し話題を変えますが、野田政権になって、多少はましになったと思っています。ただ、やれそうもないことを「やる」と言わないという1点のみの話です。消費税はやれそうもないと思う人もいるかもしれませんが、それはさておき、普天間問題で最低でも県外に移設するなどというやれそうもないようなことは、野田さんは言っていません。

実際にいろいろ検証しても、「最低でも県外移設」というのは鳩山さんの思い付きで言ったとしか思えません。沖縄に行って、サービスしなければいけないと思ったのでしょうか。直前に亀井静香さんがけしかけたという説も無きにしもあらずなのですが、誰がけしかけたかは別として、街頭演説で、党の幹部が思ってもみなかった「最低でも県外移設」という発言があったり、「首相を辞める際には私は国会議員を辞めます」と言ってみたりということからすれば、まだましになったなどは思うのですが、実際に行われている政治というのは見てのとおりです。

#### 4. 田中防衛相をめぐる

この話をすると自分で政治をおとしめているような気がするのですが本当はしたくないのですが、昨今の話題ですからしよと思えます。一番の今の話題というと、残念ながら消費税でも在日米軍再編話でもなく、どうしても触れなくてはいけないのは田中直紀さんの話です。眞紀子さんが「パパ」と呼んでいる人です。冗談ではなく、これからの政治を考える上で重要な話だと思えますので、あえてします。

金曜日の午後に関内閣改造をしたわけですが、その日の朝、私はちょうど「朝ズバッ！」に出ていました。前夜、よりにもよって防衛大臣を田中直紀さんにするらしいという情報がありましたので、「朝ズバッ！」で、まだ正式決定する前でしたが、「驚いたのはこれですよ」ということで田中直紀さんの話をしました。「残念ながら私は、田中直紀さんが防衛問題や安全保



障問題、外交問題に詳しい、あるいはその方面に関心があるという話は1回も聞いたことがないのですよね」と言いました。

ただ、それを言った後、眞紀子さんは結構ああいふ番組をよく見ているので、文句を付けられてもかなわないと思って、ちょっと調べてみたら、田中直紀さんは直前に参議院の外交防衛委員長をやっているわけです。野田さんも、決めた後の記者会見で「参議院の委員長をやっているのですよ。どこが素人ですか」と開き直っていました。それを思い出したものですから、「参議院の委員長をやっているのですけれどね」とは付け加えたのですが、私は今まで田中さんがその方面に詳しいという話は聞いたことがないという話をしました。

案の定でしたね。防衛大臣になった瞬間に「私は素人なので、素人の方がシビリアンコントロールが効きやすい」と言った一川さん以上というか、はるかに越えていました。そのことが、とにかくテレビに出てすぐに分かったわけです。武器輸出三原則の話と、日本の自衛隊がPKOに参加するときの武器使用三原則の話をまるで混同している。司会のNHKの島田解説委員の質問を全く勘違いしてしゃべり続ける。勘違いしていることにも気が付かないようなところから始まって、昨今は見てられません。皆さんもそうでしょう。クイズのような質問をする方もいけないのですが。

私の嫌な予感だけはすごく当たりました。「朝ズバツ！」で「直紀さん、ちょっと大変でしょうね」という話を最初にしましたし、その後、国会が始まる前に毎日新聞のコラムに、「嫌な予感がする。国会はきっと、最近はやりの『田中さん、〇〇は知っていますか』というクイズみたいな質問でおおよそ時間を取られるに違いない」と書いたら、そのとおりになっていました。

見るに堪えないですよ。それまでに硫黄島と沖縄の伊江島と勘違いしていたこともあって、聞く方も聞く方なのですが、「硫黄島」と書いたフリップを出して、テレビカメラの前で「大臣、これは何と読むのですか」。しかも、この前首になった秘書官が後ろの方で「いおうとう」と平仮名で書いたメモを渡すところ、それまでもが映ってしまう。それをまた、質問する照屋寛徳さんという沖縄の社会党の方が、「メモを渡すな」と言う。ほとんどいじめに近い光景がずっと繰り返されているわけです。私ですら懸念するような人事をなぜしてしまうのか。沖縄の人に失礼です。

仲井真知事もしょっちゅう言っていますが、「これまで何人防衛大臣が替わったのですか」「毎回毎回、同じ説明を私たちはしなければいけないのですよ」。それを何度も何度も言うわけです。本当に沖縄県民に失礼だと思います。ですから、そのときは私はテレビ番組で「これで一川さんを替えるのだったら、経験者にした方がいい。経験者の中で一番まともだったのは北澤さんですよ。北澤さんを防衛大臣に再登板させるのが一番いいのではないのですか。防衛省の方でもまあまあ信頼が厚かったですから」と言いました。そうやって考えていた人が何人もいます。

ところが、なぜ北澤さんを選べないかという、本当にくだらない話なのですが、興石さんとライバルだからです。要するに、将来参議院議長を争うであろうというライバルで、二人は仲が良くない。興石さんらしいといえば興石さんらしい考え方です。反小沢一郎さんの急先鋒である岡田克也さんを起用したから、それを少し薄めるために小沢系の人を起用した方がいい。いかにも興石さんらしい党内バランスで、それで選ばれたのが田中さんだったということです。

しかも、防衛大臣は参議院の枠だという発想をします。私は民主党の連中に「絶対国民は理解できないよ」と何度も言っているのですが、今どきそういう発想をしてしまうのです。一川さんもそうでした。そんなこと、国民の知ったことではありません。民主党の中には、防衛に詳しい若い連中もたくさんいるわけです。それでも、先ほど言ったように防衛大臣が替わる度にまたゼロから説明するのでは本当に気の毒ですから、経験者、ベテランを配置すればいいと思いますが、それもまた将来参議院議長を争うというような事情でそういうことを平気で決めてしまうというところに、やはり相変わらずだなと思わざるを得ません。

## 5. 劣化する政治

もう一つ、ここまでは皆さんがおっしゃることですが、実はこの話がとても重要だと思っているのは、田中直紀さんの問題だけではないのです。振り返ってみましょう。民主党内閣になって、いろいろ言われて辞めた人が何人もいます。古くは、「法務大臣というのは楽ですよ。答弁は二つでいい」と言って辞めた柳田さん。それから、被災地に行ってサッカーボールだからグビーボールだかをけったりして、揚げ句の果てに県知事がちょっと遅れて

来たからといってテレビカメラの前で怒鳴って、「オフレコだぞ」と生意気なことを言って辞めた松本龍さん。それから、これは報道の仕方にちょっと論議がありましたが、福島から帰ってきたその晩に東京の宿舎の前で記者団に取り囲まれて「放射能を付けちゃうぞ」と言って辞めた鉢呂さん。

単に軽口をたたいただけなのですが、やはり看過できません。この話は差別の根源なのです。今、もしかしたら大阪にも福島から転居してきた子どもたちがいるかもしれません。関東にはたくさんいます。そういうところで、実は子どもたちがいじめの対象になっている。全く無理解で、お母さんが「あの子と付き合っちゃいけませんよ」「触っちゃいけません」みたいなことを言う。古い話で言えば、映画にもなった「黒い雨」を思い出していただければいいのですが、広島・長崎の原爆の後ずっと続いた、広島出身であることを言うてはいけない、言えない、広島出身だと言っただけでお嫁に行けないというような差別が今後起こり得る。今、既に始まっているかもしれません。

「放射能を付けちゃうぞ」などというのは、全く無理解で無知識な、事実と全く違う発言なのですが、そういうことを国会議員が言ってしまうというのは、本当に許せません。その後の記者会見で言っていた「死の町だった」というのは許容範囲だと思いますが、「放射能を付けちゃうぞ」というのはあらゆる差別の根源的な話ですから許してはいけないみたいなことを言われて、結果的に鉢呂さんは辞めました。

この共通点は何だと思えますか。みんな大ベテランなのです。私はここが深刻な話だと思うのです。人々はあまりそこに注目しませんが、松本龍さんは当選7回で、野田さんより当選回数が多いわけです。鉢呂さんも多いです。柳田さんも、衆議院議員をやって参議院議員をやりました。直紀さんも、もともと福島で衆議院議員をやっていて、参議院に転出しています。私の政治記者歴と同じぐらいに、皆さん20年以上国会議員をやってるわけです。そこがむしろ深刻ではないかと思うのです。なぜそんなに長くやってきた人がそうなるのか。

もう一つの共通点があります。長くやってきて、一度も役職にちゃんと就いたことがないのです。もちろん民主党が政権を取るのは初めてですから初入閣の人ばかりですが、それまでにほとんど役職に就いたことがない。鉢呂さんは国対委員長をやっていましたが、例えば田中直紀さんのときに、私は

「朝ズバッ！」で「この人が安全保障に関心があるなんて聞いたことがないのですよね」と言いました。これはフォローした方がいいかなと思って、「でも参議院の委員長をやっていますけれどね」と言ったのですが、ふと考えたら、私は田中直紀さんと二十何年間一度も話をしたことがないということに気付いたのです。なぜかという、取材する必要がないからです。

これは深刻なのです。鉢呂さんを除いては、ほとんどみんなそうです。柳田さんも長く当選を重ねてきたので知っていますが、一度も取材したことがないという共通点に気が付いたのです。クールに言ってしまうと、取材する理由がないからです。彼らは、テレビカメラの前で何かをしゃべったり、あるいは新聞記者に取り囲まれて何かをしゃべったりして、その発言が世の中にどう受け取られ、どう報じられていくのかということを経験したことがまるでありません。今まで一回もなかったのです。むしろここにいらっしゃる首長さんや議長さんたちの方が取材慣れしているかもしれません。

今までそういう経験がなかったから舞い上がってしまうのです。「放射能を付けちゃうぞ」も、多分、サービスなのです。実態は、笑いを取ろうとしたのだと思います。あるいは、柳田さんが尖閣の漁船衝突のときに「答弁は二つでいいです。本当に法務大臣というのは楽ですよ」と言ったのも、地元の後援会の席でした。

今までなら、後援会の席に新聞記者やテレビカメラが来ることはなかったのです。ところが、何といても当事者の法務大臣ですから、後ろの方にテレビカメラが並んでいるわけです。そういう状況なら、私なら意識します。しかし、そういうことも分からなくて、後援会で笑いを取ろうとしたのです。「楽でいいですよ。皆さん、ご心配をかけていますけれど、答弁は二つでいい」。私はあのときのビデオを何度も見ましたが、笑い声は全然起きませんでした。むしろ後援会の人たちの方が「何を言っているのだ、この人は。大丈夫か」と思ったに違いありません。それぐらい、むしろ笑いも取れずに凍り付いたというのが実態です。

そういう経験がない人が大臣になるというシステムなのです。人材不足といえばそれまでですが、結局、自民党政権のときと同じように年功序列でいかざるを得ないのです。自民党政権も、ど素人の人が大臣になって「図らずも」と言うと、小淵さんぐらいからだと思いますが、「『図らずも』と言うな。ちゃんと狙ってなったと言え」と言って記者会見での「図らずも」発

言を禁止しました。それが今では、「図らずも」「全く今まで勉強したことはありませんが、今度〇〇大臣になりました」という発言が当たり前のようになっています。それと同じように、年功序列、当選回数を重ねればそうせざるを得ないというところに限界があるというポイントが一つです。

もう一つ考えたのです。直紀さんにしても、見るに堪えないシーンが繰り返されるのは、国民そのものがさげすまれている感じがしませんか。ああやってテレビ中継もある予算委員会の中で、「この漢字、どうやって読みますか」という質問を大臣に出す方も出す方ですし、答えられない方も答えられない方なのです。しかし、それを見ていてなぜ私がこんなに嫌な思いになるかという、国民そのものが、あるいは日本という国そのものがさげすまれているように感じるからです。あれは本当に国益を損ねていると思います。

残念ながら、今、日本という国は海外で話題にならなくなりました。ですから、海外で日本の国そのものが報道されることはなくなっています。それは決していいことではありませんが、この予算委員会の模様をまともに取り上げているとしたら、国家機密を暴露しているようなものです。この大臣はばかだ、能力がないと言って、しかもその人が安全保障も引き受けているということをみんなの前で笑っているのです。本当にそれでいいのですか。国家機密を世界中に暴露しているようなものだと思います。

## 6. マスコミの責任、有権者の責任

それプラス、国民そのものがさげすまれている、おとしめられている感じがするというでふと気が付いたのですが、さらにこの問題を進めると、あの人たちは何度も何度も当選しているわけです。そうすると、そういう人を七度も八度も当選させる有権者にも責任があるのではないかと思います。

もちろん、そういう人を候補にする政党がいけませんし、その前にまるで勉強していない本人もいけないのです。安全保障だけでなく、常識です。それなのに、自衛隊と憲法の関係、なぜ自衛隊は一応認められているのかということ質問されて、答えられないのです。その昔、芦田修正というのがあって、憲法9条の第2項にはこうなっていますよと話をしても、「はあ、これから勉強させていただきます」と答えてしまうのは、国会議員としてどうかという話です。それは本人が悪いのですし、そういう人を候補者として

選ぶ方も悪い、ましてや閣僚にする方はもっと悪い。野田さんの任命責任は極めて大きいのだと思いますが、それはもしかすると有権者の責任かもしれない。堂々巡りをしているわけです。

この話は後で橋下さんの話につながりますので覚えておいてほしいのですが、私の堂々巡りというのは、では、マスコミはいつも選挙のときに、この人は国会議員としてどんな活動をしていると報じているのか。ましてや新人議員になったときに、この人はどんな人であるとちゃんと報じているのかどうか。あるいは、ここ2回の総選挙を振り返ってみると、2005年の郵政選挙のときには、「郵政民営化」と叫びさえすればみんな当選してしまった。2009年の衆議院選は「政権交代」と叫べば当選してしまった。いつも必ず怒られるのですが、それを先導したのはマスコミではないか。全くおっしゃるとおりです。それは承知の上でしゃべっていますが、私は今、反省しているのです。そういう選挙をずっとし続けてしまいました。

小選挙区比例代表ができたとき、私も当時から選挙制度の変更についてずっと取材してきましたからよく覚えています。もしかすると本当に3分の2を取るぐらいの一方的な選挙結果になるかもしれないということは想定していました。それから、政権交代が起こりやすくなるということももちろん想定していました。ただ、あのとき、政治家も、われわれも、学者も、役人も全く想定しなかったのは、名もなき比例代表の人たちが続々受かっていくという事態、しかもその人たちが1回限りで去っていくということです。

1回限りで去っていったのは、名簿に登載する人数が足りないからといって自民党の事務局の名前を入れたら議員になっちゃった人たちです。そういう人たちが議員になっていくことを全く想定していなかったのです。次の選挙で一番苦勞するのは、恐らく小沢ガールズとか小沢ボーイズといわれている人たちだろうと思います。

さらに言えば、毎年恒例のように、暮れになると政党助成金欲しさに新党ができます。去年の暮れにもできました。よりもよって、その新党の名称が「きづな」です。つけもつけたりと思いますが、あの9人のうち8人は比例代表です。これは問題なのです。本当に恥を忍んで言うと、代表をやっている内山さんは小選挙区ですから多少は知っているのですが、残り8人は全く知らないのです。何をやっているのかも分かりません。逆に言うと、今のままではとても次は再選できないと思うから新党に走るということです。後

で話しますが、あの人たちも「頼りは橋下さん」みたいなどころがあるわけですが、そういう状態になっています。

もちろん、われわれメディアにも責任があります。結果的にここ2回の総選挙は、例えば2005年のときは、郵政民営化と叫んでさえいれば当選しました。しかし、1回限りで落ちた方は大阪にもたくさんいらっしゃいます。今度も、結果が出る前に言うのは失礼ですが、その人たちが当然のように危ないと言われていきます。

われわれ報道する方にもとても責任がありますし、そういう選挙を2回やって、今私たちが考えなければいけないのは、次はどうなるのかということです。政治が劣化したと言うのはとてもたやすいですが、政治の劣化というのは、報道側のマスコミの劣化でもあります。それは間違いなくあります。結果的に日々そういう報道しかしてこなかったという反省がもちろんありますが、もう一つは、有権者も少し考えていかないといけない時代にいいよなったということです。

われわれ報道する側も含めて、政治家だけが悪いのではなく、日本全体が本当に厳しい状況に来たと思っています。今度の選挙はますますそうなるという感じがしています。やはりわれわれメディアが少しレベルを上げないと、この国の政治は同じようなことばかり繰り返すという危機感があります。

## 7. 解散・総選挙の時期を読む

皆さんのご関心は、この先どうなるのかという話だと思うのですが、まず永田町の話からします。

永田町は、ひとところに比べて解散風が吹いている感じがします。外れると恥をかきただけなので、あまり見通しの話はしたくないのですが、ひとところは3月解散というのもありかなと私も思っていました。ところが、それは少し消えている感じがします。もちろん、自民党が早く解散したくてしょうがないというのは変わりません。一番大きいのは、こういう話をするとう政治をまた自らおとしめてしまうのですが、落選議員がたくさんいらっしゃって、その人たちにはお金がないという事情だと思います。あれだけ衆議院議員が激減してしまったので、政党交付金が減って、だんだん耐えられなくなっているという事情が大きいです。

そういう中でなるべく早く解散したいという基調は同じなのですが、ですから、3月に予算が成立した後、去年と同じように予算関連法案が延々とあって、それがどうなるか分かりません。さらに言うと、今回の場合には消費税をどうするかという大難題があるわけですが、いずれにしても3月に不信任案を出して、去年の6月と全く同じように、小沢さんなり鳩山さんなりがそこに乗っかるというシナリオも無きにしもあらずです。それは全く打ち消すものではありませんが、今言ったように、今、選挙をやったら一番大変なのは、小沢さんが抱えている若い人たちです。今、選挙をやったら、とても当選がおぼつかない。

小沢さんも小沢さんなのです。私は小沢さんに批判的な一人なのですが、「国会なんかにいってもしょうがないから、とにかく平日に地元を回れ」と言っているのです。それを言っておしまいだと思います。震災以降、国会議員は何をやっているのだと問われている中で、そういうことを言うことそのものが私の理解を超えています。いずれにしても、それは弱いからだということでしょう。ですから、今、一番選挙をやりたくない人たちというのは、実は小沢さんのグループです。そういうことから考えると、そうたやすく乗れたものではないだろうと思います。

それともう一つ、自民党の中でも、早く選挙をやりたいのはやまやまだけれども、今やってもどうかと懸念する向きがあります。ありのままに言うと、今選挙をやったら橋下徹さんが得するだけだというのが永田町の大きな意識になっています。

私もよくMBSの記者と話をしたりするのですが、去年のダブル選が終わった直後から、来年の政治の中心人物の一人は橋下徹さんですよと大きい声で言ってきました。与良さんはおだて過ぎだとしられたこともあるぐらいに言ってきましたが、その予想は大体当たっていると思います。今、私が予想した以上に中心になっているというか、さすがにシロアリとは言いませんが、みんなが橋下さんに擦り寄る状況になっています。逆に言うと、橋下さんが怖いという状況です。

そういう意識があるので、今選挙をやったところで、橋下徹さん、大阪維新の会が得するだけではないかというような気分があって、やはり3月解散というのは難しいのかなという感じがします。

それがつらつら続いて6月になって、これもちょっと度胸がない言い方で



申し訳ないですが、6月の通常国会会期末の解散というのは五分五分ではないでしょうか。皆さん多少は覚悟しておいた方がいいですし、既にわれわれマスコミもその辺を前提として選挙報道の準備をしているのは確かです。

それを過ぎると、9月にはまた民主党の代表選がありますし、自民党も総裁選がありますので、チャラになる感じがあります。谷垣さんは交代するだろうという話になってしまうという複雑な展開になりますので、6月にあるかないというのが一つの大きなポイントになると思います。

それと、これも見通しは非常に難しいのですが、ご関心の向きででしょうかと言及しておきますと、消費増税法案がこの国会で成立するというのはどんどん難しくなっているのではないのでしょうか。弱含みの言い方で申し訳ありません。成立する可能性は、絶対とは言いませんが、日々可能性は少なくなっている感じがします。いずれにしても参議院で通さなくては行けないのですが、自民党なり公明党なりが賛成しない限りは法案は通りませんので、少なくともこの国会までは難しいかなという感じがします。

私の立場を明らかにしておきますと、増税はやむを得ないと思っています。自民党議員の多くもそう思っているのですが、では一緒にやりましょうということにはなかなかありません。それが行き詰まって解散する。要するに、郵政のときと同じかもしれませんが、参議院で増税法案が否決されて解散するということもあるのかなというイメージです。いずれにしても、今の状況では、俗に言う与野党協議で、自民党も公明党も協議のテーブルに着いて、消費税増税を決めましょうということにはなりにくいと考えています。もしご質問があれば、消費税の政策の話もしたいと思いますが、その前にどうしてもここで言うておかなければいけないのが橋下さんの問題です。

## 8. 橋下氏の主張 — 政治の仕組みを変える

先ほど言いましたように、永田町が大阪の新聞を取り寄せるぐらいに、日々この大阪の動きに注目しているというのは確かで、みんな怖がっているわけです。橋下さんについては、迷惑を被っている方もいるでしょうし、首長さんの立場は大変だろうと同情もいたしますが、彼は「新聞社の論説委員なんてくずばかりだ」という言い方をします。私もそのくずの一人に数えられているのかもしれませんが、私は現時点で彼を「ものすごく勘所がいい」と評価しています。去年の暮れに大阪毎日放送の「ちちんぷいぷい」で30分

ぐらい同席して話したことがあり、その翌朝、「朝ズバツ！」に大阪のスタジオから出てきて、2日間続けて話したのですが、それ以前から、この人はものすごく勤所がいいというのが私の評価です。

というのは、去年の暮れにテレビで話したときにちょっと驚いたのは、こういうことを彼が言ったからです。これは大きなニュースにしてもいいと思ったぐらいです。多分大阪の記者は日々聞いているからニュースにしようという感覚はなかったのだと思うのですが、例えば消費増税の話になったときに、彼は選挙などでも、税率を地方で決めさせてくれと言っていますね。多分、道州制なり連邦制なりの考え方に基づく話だと思います。今の法律ではとてもできませんが、なかなかまい言い方のような気がしていました。

番組で話しているときに、「菅さんであろうが、野田さんであろうが、今の政治の仕組みの中では何も物事を決められないし、動かない。消費税の話だったら私に決めさせてくれ。私なら決められる」と言うわけです。なぜかという、「私は公選で選ばれた首長だから」です。全てそこに依拠し過ぎなところはありますが、私は公選で選ばれた首長であって、私の決断でできる。ところが、今の議院内閣制の下での仕組みの中では、トップがどんなに立派な人でも、結局誰がやっても決められない。そこで一足飛びに、「私は首相公選制がいいと思う」と去年の段階から言っていたわけです。

皆さんは日ごろ聞いているからあまり思わないのかもしれませんが、今、この時代に首相公選制を言う橋下徹という人に、私は正直言ってびっくりしました。これは受けますよ。私は首相公選制はお勧めしません。しかし、先ほど来から今まで1時間以上、政治の劣化の問題と政治が動かないという問題、政治は一体何をしているのだという問題を言ってきましたが、私も去年からずっと、結局仕組みを変えていくしかないのではないかと考えているのです。

今や、誰がやってもそうだと思います。いつか坂本龍馬が現れるかもしれない、あるいは織田信長が現れてくれるかもしれない。そういう夢は持ちたいですが、そんなのは幻想ですよと私はいつも言っています。なかなかそうはなりません。そうなると、まず仕組みを考えていかなければいけません。今の施政の仕組みというのは果たして時代に見合ったものなのかと、私も去年ぐらいからずっと思っていました。

私は、首相公選制よりも二院制の問題を考えたいと去年からずっと思っ

いまして、一院でもいいではないかという暴論を私は抱いているのです。二院でないと先進国ではないように思われるかもしれませんが、そもそも終戦後、GHQが日本政府に示した憲法改正草案は一院だったのです。貴族院を廃止して衆議院だけでいいというものでした。もちろんGHQ側からすると貴族院という非民主的な議会は廃止したいという思いの方が強かったのですが、日本側からすると、もしかするとこのご時世、衆議院だけだと、社会主義革命政権が誕生してしまうかもしれないというような気持ちがあって、何とか二院を残してくれということで、参議院という名前に変えて残したわけです。

しかし、実は、どさくさ紛れで二院制が復活してしまった感があります。やはり今の憲法は参議院の部分をどさくさ紛れにつくった感があります。結果的に、世界で一番強い第二院というか、上院というか、衆議院とほぼ変わらない第二院ができてしまったということが言えると思います。

自民党一党支配時代は、私たちも参議院選はほとんど取材しないぐらいに自民党が圧倒的に強かったので、そんなことは思いもしませんでした。このねじれは今に始まった話ではありません。土井たか子さんが大ブームで、マドンナなどといって女性議員がたくさん誕生した1989年参議院選で自民党が単独過半数を失って以来、参議院で単独で過半数を取った政党はないのです。

単独で過半数を取ろうと思うと、3年に一回選挙がありますから、毎回60議席以上は取らないといけないという計算になります。ところが、2回以上続けて60議席以上を単独で取った政党はないのです。小泉時代も取れなかったのです。自民党は小泉さんのときに何とか過半数をという野望を抱いたのですが、やはり取れずに、3年置き選挙で続けて勝てない。結果的に連立政権にならざるを得なくなりました。今の民主党も国民新党との連立ですが、その前の自公政権、自自公政権、全てそうです。

本来、政権というのは衆議院選の結果で枠組みを決めなければいけないと思うのですが、実は参議院が枠組みを決めている。自公政権ができたのも、衆議院では何度も過半数を取っていたわけですから、参議院事情なのです。ですから、第二院の方が政権の枠組みまで決めてしまっている。果たしてこういう状態がいいのかどうかということを、やはり考えなければいけないのです。

皆さん、驚かれると思いますが、毎日新聞は憲法改正する必要はないという立場をずっと取ってまいりました。いまだに社論としてはそうです。私は、例えば9条や前文については変える必要は全くないと思っています。不都合もほとんどありません。防衛省も外務省も、今のままで不都合はないと言っています。国際貢献もできる、ある程度歯止めにもなっているということで、変える必要はないと思いますが、憲法を改正するのであれば、むしろ政治の仕組みみたいところから変えていかなければいけないと思います。

一院制にするという手っ取り早い方法があります。先進国は必ずしも二院制というわけではなくて、例えばスウェーデンやニュージーランドは、無駄だということで二院制から一院制に変えています。あるいは、今問題になっているイタリアも、イタリア人というのはのほほんとしているようで意外とちゃんと考えていると思うのですが、上・下院の選挙はずっと同日選なのです。憲法には書いてありませんが、二院のねじれを防ぐために、慣行として基本的に同日選になっています。そんなことをやるのだったらますます上院など要らないではないかという話になるわけですが、それも含めて参議院というのは考えていかなければいけないことです。

要らないというのも一つの手ですが、例えばこの二つの数字だけ変えれば爆発的に変わるのです。最近有名になりましたが、衆議院で可決して参議院で否決された場合には、衆議院で3分の2の多数があれば再議決・再可決するというルールが憲法に書いてあります。この3分の2を2分の1に変えさえすれば、つまり、もう一回衆議院で過半数で可決するのだというようにしてしまえば、爆発的に変わります。

逆に言うと、ますます参議院など要らない、何のために参議院があるのかという話になるのですが、当初、参議院をつくったときは、「政党とは関係なしですよ」という議論を確かにしているのです。当時の国会の議事録も全部読みましたが、参議院というのはどういう人材がふさわしいか、やはり学識経験のある人たちが大所高所からチェックするのが参議院だという議論をちゃんとしているのです。その後1回だけの選挙は、緑風会といって、それこそ『路傍の石』の作家の山本有三さんなどが参議院議員になるという時代がありましたが、自民党がそこに目を付けて、そんな苦勞をするよりも参議院も政党化してしまえということで、同じようになっていったのです。

一時は「参議院など衆議院のカーボンコピーではないか」と言われた時期

がありました。それを越えてねじれが始まり、今は、参議院の方が異常に強い、参議院が全てを決めるというような状態になっています。それは憲法の趣旨からいっておかしいのではないかと考えています。そういうことを考えていかなければいけない時期なのだと思います。繰り返しますが、政治というのは一体何か。一人ひとり文句を言っていれば切りがないのですが、その一方で、やはり形そのものを変えていかなければいけない時期に来ていると思います。

私は二院制というか、参議院の在り方にこだわるのですが、そういう中で橋下徹さんが統治機構という言葉をしきりに使いながら仕組みの話をしている。私が「橋下さんはなかなか勘所がいいよね」と言っているのは、そういうことなのです。

今、橋下さんが首相公選制などと言いますと、リベラル系の学者はそれこそファシズムだとか言いたがりますし、彼を見ているとそのきらいがないわけではないと思います。今インテリがよく言う冗談で、「ドイツのナチスも、もともとは地域政党だったのですよね」という話をしたがる人たちもたくさんいます。そうなってもらっては困るのですが、形を変えていくという彼の話については全く問題意識を共有します。そこについてはおっしゃるとおりだと思います。

どう変えていくかというのはもちろん違いますし、手法の問題もありますが、その問題意識は共有するし、逆に、これだけの政治不信、政党不信、自民党は限界だといって期待を寄せた民主党がこのありさまだという中で、彼は唯一受け皿になる。そういう中で、しかも形を変えよう、首相公選制だと言っているわけです。今日の夜ですか、最初の政策発表があるようで、そこにはもしかしたら二院制の見直しみたいなものまで含まれるのかもしれないということで、その問題意識については全く私は共有します。

ただし、それはまだ首長のやる仕事ではないというところはわきまえてもらわないと困ります。私はテレビでも2日間にわたって同じ質問をしたのです。例えば、大阪都構想はその後の道州制とどのようにつながっていくのか。実は、これはなかなか大変な問題で、仮に大阪都となったときに、東京都と同じようなことをイメージしておられるのでしょうか。巨大な権限を得るわけです。では、その後、関西州なり大阪州なり道州をつくったときに、その大阪都はどういう存在になるのか。消えるのか。

道州制になった場合、基本的に各県庁というのは取りあえず消えるわけです。どこに道州を置くかは別として、基本的に消えるということですから、道州プラス基礎自治体という関係になるということなのでしょうから、そのときに巨大な権限を持った大阪都がなくなるのか、なくなるのか。そういう政策的な疑問も多々あるわけです。

さらに言えば、道州制はいいけれども、道州制と首相公選制はどうつながるのか。イメージで言うと、今の情報ではどうも二院制も見直すということのようです。知事が国会議員を兼ねることも許したらどうだとも言っているようなので、恐らくドイツなどの連邦制が頭にあるのでしょう。例えばドイツでは知事会が上院のメンバーになっているという仕組みなので、そういうことがイメージにあるのでしょうか、制度設計がやや乱暴過ぎるというか、まだまだ分からないという感じがいたします。

ただし、何度も繰り返しますが、今、これだけ政党不信、政治家不信が起きている中で選挙をやったら、今までの経験で言うと、マスコミ報道も本当に気を付けていかなければいけないと思いつつも、相当なブームを呼ぶと思います。

## 9. 候補者選考の重要性

今のところを最終の結論にしたいと思うのですが、もう一回田中さん問題に戻らせてください。もちろん有権者にも責任があるし、マスコミにも責任があるのですが、政治の形を変えることも重要ですが、もう一つ、今現実に重要なのは、政党の候補者選びに尽きると思うのです。

例えば、減税を言っていた名古屋の市議会議員なども、問題を起す連中ばかりなのですね。30代の女性で「今こそ核武装を」と言っている人まで減税党にいたりするところですから、あえて言えばどさくさ紛れになってしまったと言えらと思います。

私が一番心配であり期待もするのですが、本当に国政に立てるのでしたら、大阪維新の会の塾生3,000人以上の応募ですか、すごいと思います。国会議員もいるとか、現職もいるのですかね。早く名前を知りたいところですが、でも、先ほどから言っているように、そうやってみんな橋下さんと仲良くなりたいわけです。次の選挙は、新党「きづな」も含めて、小沢さんのところも含めて、自民党も含めて、とにかく橋下さんとツーショットでポス



ターを撮りたいという連中ばかりです。

そういう中で新しいものをつくっていくという志はいいとすると、その中でどうやってきちんとした候補者を選んでいくのか。そこはわれわれも手出しができないので、ちゃんと候補者選考をやってくれということを願うしかありません。そうしないと、郵政民営化と叫べば当選するという、全く同じ繰り返しになりかねないという懸念があります。もし本当に国政選挙に立てるのでしたら、ひとえに候補者選定を頑張ってくれと願います。

皆さんが懸念しているとおおり、どうも国の形の話ばかりに行き過ぎていて、大阪都和道州の関係をどうするか、大阪都と他の市町村とをどういう関係にするかということをはじめとして、足元の制度設計がまだまだという感じがしますが、問題意識は非常にいいところを突いているというか、世間の人たちは「そうだ、そうだ」と喝采をするのだと思います。私ですら問題意識はそのとおおりだと思うぐらいです。ですから、候補者を立てるのであれば、本当に慎重にさせていただきたい。そうでないと、3回目の、同じ失敗をしかねません。

もう一つ言っておくと、仮に100人通るとすると、民主党は激減し、自民党もそれほど回復しないということですから、キャスティングボードを大阪維新の会が握るのです。次にどこが政権を取るかは橋下さん次第だというのはそういう意味で、さすがに橋下さん本人が市長を辞めて次で国政に出るとは思いませんが、キャスティングボードを大阪維新の会が握る可能性も十分あるということです。

ただし、だからこそ形の議論にしたいと思うのですが、参議院の事情は変わらないので、ますます訳の分からない不安定な政治になりかねないと思います。ですから、少し時間を置いて整理するところは整理する必要があります。今日は消費税の話はあまりできませんでしたが、将来のことを考えたら待たなすですから、いずれ誰かが決断しなければいけません。

この国の政治というのはそこまで行き詰まっていますし、逆に言うと、形を変えることによってもしかすると再生するかもしれません。私も腹をくくって、先頭に立って選挙報道を変えていくことに努めたいと思っていますので、皆さんもぜひこれを機にそんなことまで考えていただけたらと思います。